

人工給餌によるチョウゲンボウの食性調査

川本美千夫¹

はじめに

チョウゲンボウの食性については、これまで清棲 (1978) によりネズミや小鳥類、昆虫などが報告されている。今回筆者は、山口県の干拓地において、県内では冬鳥であるチョウゲンボウ雌1を観察し、この個体がカエルやミミズ、地上の昆虫を食物としているのを確認した。

このチョウゲンボウはほとんど毎日同じ場所・時刻に飛来するので、この個体に対し、人為的な給餌を行えば、チョウゲンボウの食性を調査できるのではないかと考え、実施した。以下に与えた食物と観察結果を報告する。

調査地および調査方法

調査地は山口県の瀬戸内海側に位置する防府市の干拓地・大道干拓で、東は河口、南と西は海に面している。この干拓地は牧草と麦とキャベツの植えつけとして使用されているが、冬期はこれらの植物はあまり生長しないので地面はむきだしの部分が多い。

調査は、チョウゲンボウが人工給餌を行なった場所に毎日訪れるのを確認した1990年12月5日から、姿を確認できなくなった翌1991年3月21日までの間で、合計52日間の観察と給餌を行なった。

1日のうち、チョウゲンボウはきまって午後3時ごろに給餌場にある農作業用の機械類を保管するための倉庫のひさしや電柱、電線によくとまり、食物をとり、午後5時ごろにねぐらに去っていった。この3時ごろから5時ごろまでの間に給餌を行なった。

最初に使用した食物はニワトリの生切身で、これをあらかじめチョウゲンボウがとまる場所の前に置く方法と、チョウゲンボウの前に投げる方法を試みて、これを車の中から観察した。次にミノガの幼虫を5匹外套からとり出し、ニワトリの切身と同様の方法で与えて観察をした。チョウゲンボウがこのミノガの幼虫を食べたので、以後観察が終わる3月21日まで、ミノガの幼虫を1日あたり50~60匹与えた。

チョウゲンボウが食物を与える人間になれてきたと思われた1991年1月11日からは、車から外に出てチョウゲンボウに10mくらいまで接近して食物を投げ与えた。そのほかにキングヨ、カワエビ、ツグミ、セグロセキレイ、ミールワーム、ミミズ、ゴカイ、オニイソメ、カキ貝、チクワ、パン、カイコガのさなぎ、ムキエビの合計15種類を、ニワトリやミノガの幼虫と同様の方法で与え、その反応を観察した。ツグミとセグロセキレイはほかの場所で死んでいるのを取得したもので、ツグミの頭部には損傷があったが、セグロセキレイの方には外傷は見あたらなかった。

給餌時は、人間になれさせる目的で努めて口笛を吹いたり、声をかけたり、食物をもった手を何度も振るといった行動をとった。

観察にさいしては記録と同時に写真撮影とビデオ撮影を行なった。

1991年8月20日受理

1. 〒746 山口県新南陽市日地町 2-18. B-34

結果

与えた15種の食物の中には食べたものと食べなかったものがあるが、チョウゲンボウが好むと思われたのは、ミノガの幼虫とツグミ、カワエビであった(表1)。

ミノガの幼虫は、観察初期から終りまで使用でき、好む食物と考えられた。チョウゲンボウはこの食物を与えられることになると、外套から幼虫をとり出す時の人間の手の動きに敏感に反応し、こちらが投げるのをまっているのがうかがえた。そして前に投げるとすぐに食べに来て、時にはピーピーとヒナの鳴き声のような声を発した。また、ミノガの幼虫を平たい皿の上にとめて10個、20個単位で置いてみたところ(図1)、すぐに食べつくし、外套のまま与えると足ではさみ、くちばしで中の幼虫をとり出して食べた。ただし、あらかじめとり出された幼虫になれば、外套のままでは食べなくなった。

ツグミはハリガネで小石を結びつけて与えたが、チョウゲンボウに見ただけで飛翔の準備や、注目するなどの反応を見せた。食べ方を見ても非常に好むようで、人間が約3mくらいに近づいても食べていたが、これ以上近づくとつかんで持ちさろうとした。その後、チョウゲンボウはツグミの体からちぎりとった片方の翼を運びさり、20m離れた草かげに隠して約1時間後に再度これをひき出して食べた。しかし、同じ方法で与えたセグロセキレイの死骸に何の反応も見せなかった。それどころかセグロセキレイを投げて食べに来ないし、その近くにミノガの幼虫を投げて誘っても食べに来なかった。

ニワトリの切り身は最初に給餌に使用した食物である。最初は何の反応も見せなかったが、ミノガの幼虫による給餌が進むと食物を与えられることになったのか、与えたニワトリの肉片を食べることがあった。しかし、切り身だけを投げ与えたのではほとんどの場合食べに来なかった。食べたのはミノガの幼虫で誘った時が多かった。

カワエビは体長4cm程度の生きたものを2日にわけて約25匹与えた。これは投げ与えるとすぐに飛んできて食べた。しかし同時にミノガの幼虫を与えると、幼虫のほうを食べた。食べ方は、ミノガの幼虫は大きなものを除いてほとんどの場合そのまま飲みこむが、カワエビはすべて一度足でつかんでくちばしでちぎりながら食べた。

キングョは4cm程度の生きたものを投げ与えたら、カワエビと同じように足でつかんで食べたが、一度、チョウゲンボウの目の前で跳ねるキングョに驚いて飛び上がったことがある。

ミミズは最初の2匹は食べたものの食べ残すことがあり、オニソメを3~4cmに切って与えた時にも同じ行動を示したので、これらは以後与えなかった。ゴカイについても2匹与えて食べたが以後は与えなかった。

ミールワームは投げると食べには来たが、小さいので草陰に落ちるとチョウゲンボウが発見できないことが何度かあったので、10匹程度与えただけにした。

カイコガのさなぎは瓶詰めのを何匹も投げ与えたが、くわえるものの食べず、ムキエビは料理用の生を与えたが、これも食べなかった。

チクワ、カキ貝、パンはそれぞれ1度だけ1片づつ投げ与えた。チクワ、カキ貝は食べたが、パンは足でつかみ、少しかじっただけであとは残した。

考察

今回の調査はチョウゲンボウの雌1個体に対する食物給餌のため、得られた結果を直接野生のすべ

表1. 給餌日と与えた食物の種類, 数量, および反応.

Table 1. The kinds and quantities of food given to the Kestrel and the reaction to the foods.

給餌月日 Date	食物の種類 Kind of food	数量 Quantities	反応 Reaction
12/12~3/13	ミノガの幼虫	2,300匹	好んで食べた
12/11	ニワトリ骨付き	2片	食べなかった
12/29	ミールワーム	約10匹	食べた
1/19, 2/12	ニワトリ切身	少量	食べた
1/11, 1/12	カワエビ	25匹	好んで食べた
2/25, 3/7	ツグミ	1羽	好んで食べた
2/2, 2/4	セグロセキレイ	1羽	食べなかった
1/14	キンギョ	6匹	食べた
1/8, 1/19	ミミズ	3匹	食べたが一部残した
1/8	オニイソメ	2片	食べたが一部残した
1/8	ゴカイ	2匹	食べた
1/27	カキ貝	少量	食べた
2/11, 2/12	ムキエビ	5~10匹	食べなかった
2/25	カイコガのさなぎ	5~10匹	くわえたが食べなかった
1/30	パン	少量	かじったあとは残した
1/19	チクワ	少量	食べた



図1. 皿の中のミノガの幼虫を食べる雌のチョウゲンボウ.

Fig. 1. Female Kestrel eating bagworms on a plate.

でのチョウゲンボウにあてはめることはできない。しかし、このチョウゲンボウがミノガの幼虫や、カワエビ、少量ではあるが、ミズズ、ゴカイ、オニイソメを食べたことは、チョウゲンボウの食性がとても広範囲にわたっていることを示していると考えられる。カワエビやキンギョを食べたことは、水位が下降した沼地でも甲殻類や小魚などの食物探しを行なっている可能性を、ゴカイやオニイソメを食べたことは干潟においても食物探しを行なっている可能性を示した。

鳥類ではツグミとセグロセキレイを各1羽ずつ与えたが、前者は食べて、後者は食べなかった。両者とも死骸であるが、原形を保っていた。チョウゲンボウにとってツグミとセグロセキレイとに嗜好差があると考えられるが、今回の結果だけでは結論は出ない。

カイコガのさなぎは瓶詰めで水溶液に潰けこんだものを与えたが、防腐剤の関係か何度もくわえたが、食べなかった。

パンは餌台のパンを食べるチョウゲンボウが紹介されてもいるので(浦本・樋口 1972)、頻度、量は不明ではあるが、食べるようである。

観察を通じて感じたことであるが、人になれたことで自然では食べない食物も人間が与えることで食物として認識したり、自然では食べる食物も、人間から与えられる、より好む食物に期待することで食性に変化をおこすことが考えられる。また、チョウゲンボウのその日の状態、空腹かどうかにも反応が左右されるであろう。

調査をはじめの前、平地で昆虫類を食物としていたチョウゲンボウを見て、この個体は小鳥を捕食することがあまり上手ではないので空腹のあまり昆虫を食物としていたと考えた。しかし、調査が進むとこの考えは誤りで、チョウゲンボウが給餌の時間前、あるいは給餌中、給餌が終わりねぐらに入る前、簡単に小鳥を捕食するのが頻繁に観察された。

給餌をはじめたころには、チョウゲンボウが人間になれて、与えた食物を食べるかどうかが疑問であったが、給餌を続けているととてもなれて、最終的には観察者とチョウゲンボウの距離が最短で2 m以内にまでなった。だが、直接人間の手から食べるまでには至らなかった。また、給餌により定着し、給餌場付近での繁殖をも期待したが、3月21日には繁殖地へ向かって飛びさったのか、姿を見ることができなくなった。

チョウゲンボウが人間になれた理由には、季節が冬期で1羽だったこと、雌だったこと、警戒心が特別うすい個体だったことがあげられる。しかしチョウゲンボウがこれほど人間になれるとは思っていなかったのが、驚きを感じた。同時に、人工構造物に営巣を試みるのも納得できた。

最後に、今回の調査が少しでもチョウゲンボウの食性を知る手がかりとなり、保護した時、あるいは人工繁殖、飼育などに役立てばよいと考える。

謝 辞

この調査を進めるにあたり、行動観察に何日にもわたりご協力いただいた日本野鳥の会山口県支部所属の保井浩、隅賢の両氏には紙面より感謝申し上げたい。

引用文献

- 浦本昌紀・樋口広芳. 1972. チョウゲンボウ. アニマルライフ 84: 2348-2350.
清棲幸保. 1978. 増補改訂版 日本鳥類大図鑑Ⅱ, pp. 769-772. 講談社, 東京.

Food habits of a wintering Kestrel analysed by artificial feeding

Michio Kawamoto¹

1. From 5 December 1990 to 21 May 1991, artificial feeding of a female Kestrel was conducted at Daidou reclaimed land in Houfu-city, Yamaguchi Prefecture.
2. The kinds of food were pieces of chicken meat, bagworms, goldfish, living shrimps, a thrush and others. There were fifteen kinds in all.
3. The female Kestrel liked bagworms, thrushes, living shrimps.
4. Artificial feeding was continued, but she did not come there after 21 May 1991. She went to the breeding place.
5. This is the first record of artificial feeding for a Kestrel in Japan.
 1. Hijimachi 2-18, B-34, Shinnanyou-shi, Yamaguchi 746